

進捗状況の概要【1ページ】

学長の陣頭指揮のもと、学部・研究科で実施するプログラムも含め、全てを本部直轄事業として全予算を掌握し個別に予算承認することで、事業を一体かつ強力に推進する体制を確立した。また、海外有力大学学長などで構成される Global Advisory Council などのアドバイスも定期的に受けつつ事業を推進した。補助金に加えて、それを上回る自己資金を投入しつつ、全組織を上げて取り組みを進めた。結果、施策や成果指標等の進捗に関しては、ほぼ計画通りあるいは計画を上回って進捗している。課題とされている外国人留学生受入数についても交換留学生や短期プログラムの充実によって確実に伸びている。

クロス・アポイントメント制度を活用し、慶應義塾のレピュテーションとサイテーション向上に貢献が期待できる海外副指導教授を「長寿(Longevity)」「安全(Security)」「創造(Creativity)」の3つのクラスターに分類して任用する新たな制度の運用を開始し、大学院学生の論文指導等を国際レベルで推進した。特にサイテーションに影響が大きい国際共著論文の執筆について各教員の協力を要請した。2015年度は通年で60名、2016年度は通年で80名の海外副指導教授を任用した。また年俸制によるテニュアトラック外国人教員を8名任用した。外国人教員を雇用することで、日本人学生にとっては海外留学へのハードルを下げかつ留学への意欲を掻き立てることに成功している。また、英語による授業が増大することで外国人留学生がスムーズに日本の大学教育に溶け込める潤滑剤となっており、さらに、共同執筆論文の増加につなげ国際的なサイテーション向上に寄与することも期待している。特に海外副指導教授制度を全研究科に拡大したことで、学生が国際レベルで指導を受ける事により、グローバル感覚を身につけ国際的にインパクトファクターが高くサイテーションが向上する論文を書く力をつける事が出来るようになった。海外副指導教授と学生、主旨導教授との間での共同研究や共同論文などの成果も出始め、成果として2014・2015年度の2年間で海外副指導教授と本学教員との共著論文36報、海外副指導教授と学生との共著論文7報が創出されている。

統合的研究教育拠点として、慶應義塾の様々な教育・研究活動をクラスターと紐付け、クラスターの概念を定着させてきたが、クラスターの文理融合・学際的な活動を可視化し実現化するためのプラットフォーム「慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート(KGRI)」を2016年11月に設立した。また、海外副指導教授制度、KGRIのプロジェクト、海外連携パートナーシップ締結支援制度などの仕組みを運用し、海外の研究者との共同活動を促進している。さらに、大学院生もKGRIの所員として研究プロジェクトに参加することが可能となり、本年度は複数のプロジェクトにおいて学生が参加し活動を開始した。2014年度にGIC(Global Interdisciplinary Courses)センターを設置し、2015年4月から一部の科目を試行的に運用し、2016年4月から本格運用を開始した。GICでは外国語で学ぶ「学際的英語研究力養成共通科目」群を運営し、GICセンター設置のコア科目75科目に対して履修者は延べ1,162名、学部や国際センター設置のリサーチ科目を含めると、471科目延べ8,337名の学生がGIC科目を履修した。経済学部で、英語のみで学位取得が可能なコース Programme in Economics for Alliances, Research and Leadership (PEARL)の運用を開始した。2015年秋から3期にわたって募集を行い、定員100名を大幅に上回る出願があり、2016年9月からの秋学期に第1期生を迎えてスタートした。この新プログラム PEARL では、IB/SAT/ACT および TOEFL/IELTS を活用した AO 入試を実施している。これまで文系学部では少なかった日本語を母語としない留学生が増え、日本人学生の異文化交流の機会が増加した。

また、学事システムの国際化対応として、GPA、ナンバリング制度の国際標準化については、一部の学部で行われてきたが、GPAについては2017年度新入生から全学的に導入した。ナンバリングについては各キャンパスのカリキュラム等を調査した上で国際標準化としてその実施に向けて更に取組を継続する。

短期留学プログラム(受入・派遣)の運用・拡充を目指し、各学部・研究科において積極的に短期受入プログラムを展開し、独自プログラムを企画した。これにより2016年度は500名以上の短期留学生を受け入れることができ、日本人学生にとっても異文化交流をする貴重な機会に恵まれた。初等中等教育からの国際化についても、慶應義塾の特徴でもある一貫校での国際交流強化を推進し、英国 Winchester College、米国 Phillips Academy Andover などの英米の名門ボーディングスクール(寄宿制学校)5校への派遣制度を発足した。また、国際的な高大連携の促進として、NY 学院が隣接大学と開始しており、現在他大学とも交渉中である。

海外向け教育研究広報を拡充し、主に海外でのブランド戦略やレピュテーション向上を目指し、2016年6月に慶應義塾の Web サイトのリニューアルを行った。新 Web サイトの英語については、単なる日本語の翻訳ではなく英語での読みやすさを重視し、コンテンツの内容についても海外を意識したものを充実させた。海外での知名度の低い慶應義塾大学のブランド構築を進め、様々な広報媒体を活用してターゲットとコンテンツを明確にして発信することで、慶應義塾のレピュテーションを高め、世界の様々な国と地域から学生が意欲を持って学びに来るための情報を提供するとともに、教育研究成果の発信により国際的な研究連携の推進や研究成果のサイテーションに繋げることが可能となる。また、新 Web サイトでは、充実した英語コンテンツによって、より多くの留学生が慶應義塾大学に興味をもってくれることが期待される。また、英国の MOOCs (Massive Open Online Courses) 配信事業体 FutureLearn と配信協定 (Course Distribution Agreement) を締結し、正式に参加機関となった。日本からの FutureLearn への参加は、本学が初めてとなる。2016年7月から「Japanese Culture Through Rare Books」、2017年6月から「Sino-Japanese Interactions Through Rare Books」の2つのコースを公開している。

職員の国際化を目指し、新人職員に対する英語研修を定例化し、中堅職員に対する海外研修プログラムへの参加と、情報収集のための出張などを充実させた。

世界大学ランキングについて、慶應義塾の強みをどう生かしてランキング向上に向けるか調査・検討を進めた。世界大学ランキング:192位(QS)、世界的な大企業トップの輩出大学ランキング:世界9位(THE)、世界で最もイノベーターな大学:世界48位、アジアで最もイノベーターな大学10位(Thomson Reuters)、企業のリーダー輩出大学:世界14位(Thomson Reuters)、大学就業力ランキング:世界37位(QS)という結果も得られた。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1 ページ】

1. 学際的英語研究力養成共通科目群を指定した GIC (Global Interdisciplinary Courses) の開設

－国際的かつ学際的な人材育成の拠点－

A base for developing international and interdisciplinary personnel

2016年4月より GIC センター (Center for Global Interdisciplinary Courses) では全ての学部の学生が履修できる英語 (またはその他の外国語) による授業を提供し、一定単位を取得した学生に修了証を与えるプログラムを開始した。

GIC は国際的かつ学際的な人材の育成を目的としており、具体的には政治・経済・社会問題、文化摩擦、民族対立、あるいは医療・環境・自然科学等の分野で生じる重要課題を複合的な知識と方法論を駆使して解決し、同時に日本の歴史や文化、さらには先端科学技術の成果を積極的に世界へ発信できる人材の育成を目指す。GIC はこれらを外国語で実現したいという意欲ある学生に、効果的な学習機会を提供するプログラムである。同時に、各学部で共有可能なカリキュラムを設計し、キャンパス相互の連携強化を図ることで、学内に散在する「知」を集約する。それにより基礎教育と専門教育、学部と学部、あるいは大学と高校の間をつなぐプラットフォームとなっている。更に GIC は学部の段階において、国際学会等に参加し研究成果を外国語で発表できるだけの研究力・論文執筆力・発表力を養うことも目指している。

教育機関としての大学が、母語のほかに少なくとも英語を駆使できる国際的な人材を育成することは、いまや社会の要請であり、学生のニーズでもある。これに応えるべく、GIC センターが 2017 年度に新設する授業は、春学期・秋学期それぞれ約 40 コマにのぼる。GIC 科目は学部の履修案内にしたがって誰でも自由に履修でき、英語のレベルに応じたセレクションもない。むしろ、英語レベルに関する事前のスクリーニングなどを行わず、様々な能力や背景を持つ学生が教室に混在する状況を意図的に作り上げていると言っても良い。その理由は第一に、自分よりも優秀な友人であれ、その逆であれ、他の学生のパフォーマンスを観察することが自らを考えるきっかけとなるからである。第二に、実社会へ出れば均一な能力を持つ集団内で討議することは稀で、異なる能力や多様な言語を駆使する相手と伍していかなければならないからである。そして第三に、レベル別の英語は各学部が提供する外国語科目の授業として学習することができるからである。こうした前提のもと GIC は所属学部や英語力に関係なく、意欲ある者が好きなだけ学べる制度となっている。

2. 慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート (KGRI) の設立

－文理融合・領域横断教育研究プラットフォーム－

Keio University Global Research Institute

2016年11月、慶應義塾は大学のグローバル化をより一層推進し、世界に貢献する国際研究大学となるための基盤として、新たに慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート (KGRI) を設立した。

KGRI は、学内の関連する教育研究分野と密接に協力しながら「長寿」「安全」「創造」の3つのクラスターにより文理融合教育研究や領域横断型の教育研究を行い、その成果を広く国際的に発信することによって、地球社会の持続可能性向上に貢献するとともに慶應義塾のグローバル化を推進する。

具体的な事業内容としては

- ① 3つのクラスターを中心とした、学際融合的かつ国際的教育研究プロジェクトの実施および成果の発信
- ② 学内外の研究機関等との国際的研究連携
- ③ KGRI の目的達成に関連する教育研究への多様な支援
- ④ KGRI の目的達成に関連する講座、セミナーなどの教育的事業
- ⑤ その他 KGRI の目的達成に必要な事業

3. スーパーグローバル大学創成支援事業基金を新設

－補助期間終了後の恒久的事業継続を目指して－

2014年度の事業開始時にスーパーグローバル大学創成支援事業基金 (第3号基本金) を新設し、毎年度12億円ずつ自己資金により組入れ、2020年度までに総額84億円の基金を準備することを2015年3月の理事会で機関決定した。すでに、2016年度までに、36億円を計画通り着実に組み入れている。さらに2023年度の補助金支給期間終了後も継続して事業を行うために、他の既存の基金を有効に活用し、これまでの義塾で行っている既存の事業経費と併せて、本事業に関わる本部直轄事業経費として少なくとも年間総額7億円程度を予定し、安定的な財政基盤のもとに、他の経常的支出に影響を与えずに、財源確保を確実に実現していく計画である。